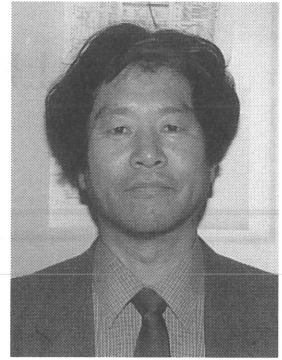


新幹線の窓から

日本希土類学会 会長
大阪大学大学院工学研究科
物質科学専攻 教授 足立吟也



「そのような年令になったのだ」といってしまえばそれまでだが、数年前から、本務の大阪大学教授のほか、いくつかの学協会の役員、特殊法人関係の委員会委員、文部省の研究プロジェクトの代表、さらには大阪大学生協同組合理事長など、自分ひとりの充実よりも、あるグループの組織化、維持展開、とりまとめなど、そのコミュニティ全体にかかわることが多くなった。本来、まず個性を主張することを良とする信条で日々を過ごして来た者にとって、昨今の自分の姿は必ずしも理想の実現にむかっているとはいいがたい。委員会出席など多い時には月に7~8回も大阪から東京に出張しなければならないが、こんな場合、自分はいったい何を何のためにしているのか、文部省から給料をもらって本当によいのかと思うことすらあるが、これは一方では得がたい環境でもある。

小生の出張は主として新幹線を利用するものであるが、客室のせまい座席と往復6時間は、窓の外をゆるやかに通りすぎる風景と、電話も来訪者も、研究資料ファイル棚もない時間と空間、すなわち、非日常性の時間と空間である。これはふだんの自分になり自分を発見する時間と空間、失われたものをとりもどす時間と空間であり貴重である。居眠りなどで浪費するのはもったいない。

小生はこの時間と空間を安売り量販店で買った1,980円のウォークマンで1巻500円で手に入れたオペラやクラシック音楽を聴きながら、もっぱら読書にあてている。これまで、いわゆる日常性の多忙さから本来好きであった読書もクラシックを聴くこともあまりできなかった。これらは多くの人々は若い時期にすまされ、小生の年令ではすでに卒業しているものであろう。過去3~4年をふりかえってみると

与謝野晶子訳源氏物語(角川文庫3巻)、吉川英治の三国志8巻、新平家物語16巻、親鸞3巻を読み、現在、中野好夫その他訳のローマ帝国衰亡史(ちくま文庫)全10巻のうち第5巻までをすませ、現在第6巻にかかっている。10年程前には新幹線の中だけで、アメリカ化学会会長が著した解説書一冊を翻訳したこともある。

沿線の四季もそれぞれ美しい。とりわけ富士山の春夏秋冬朝昼夕いずれも秀麗で何十回見てもあきることがない、風景のいわば古典である。小生はこのほか瀬田川を京都から東京にむかって渡るときの左側(2人掛け側)、浜名湖の弁天島周辺も好きである。

読書も風景の鑑賞も知らず知らずのうちに過ぎ去った時間と空間を求めているのであろうと思う。高名な評論家が自らの「読書法」を公開していることがあるが、彼らの読書は資料集めの作業であって、小生達の実験や、結果の解析と同じ日常の作業であり、なりわいのひとつであって、特に感銘をうけることはない。

小生達の読書や風景をながめることは心がそれを求めているから行うきわめて精神性の高いとなみといつて良い。